

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月1日(土)

《天国の板に書き記された名前 ～濃く書かれているか、薄く書かれているか～》

聖女テレジアは二人いますが、今日は小さいテレジアの祝日です。

今日の福音(ルカ 10・17 - 24)には、3つのことが書かれています。

一つは、派遣された弟子たちが、述べ伝えながら体験したことを嬉しそうにイエス様に報告する話です。

もう一つは、喜びに満たされたイエス様の、「神様はこれらのことを知恵がある者には隠して、幼子のように純粋な心を持っている人々に表しました。これは私が知っているお父さんらしいやり方です。」という告白。

三番目は、「全ての人々、特に預言者や宗教的に偉いと言われる人たちは、あなた方の見ているものを見たかったし、聞いていることを聞きたかった。しかし、それができなかった。だからあなたがたは、本当に幸せな者なのである。」という話です。何を見たかったのでしょうか。まことの救い主です。イエス様です。

今日皆様に話したいのは、1番目の話です。弟子たちは、いろいろな派遣の使命を果たして帰って来ます。そして、子どもが父親に「良い成績をもらったよ。」というように、褒められたい気持でイエス様に報告します。しかしイエス様は、「悪霊があなたがたに服従するからといって喜ばないように。本当に喜ぶべきことは、あなた方の名が天国に書き記されていることだ。」とおっしゃいます。

これは、信者である私たちが絶対に忘れてはいけないことです。私たちが求めている全てのものの一番上は天国です。イエス様に病気が治るようにお願いして治っても、いつかは老いて死にます。金持ちになれるようにお願いしても、そのお金を持って天国には行けません。この世にある全てのものは過ぎてしまうものなのです。「この人を本当に愛しています。この愛をくださって感謝します。」と言っても、その愛が何日続くのでしょうか。すぐに消えてしまいます。

人間が、“価値がある”と思うものをよく考えてみてください。今皆様が探し求めているものは、どういうものでしょうか。考えてみれば、それは過ぎてしまうものなのです。それで終わりだったら虚しくなるようなものなのです。

イエス様は、今日はっきりおっしゃっていますね。「あなたの名が書き記されていることを喜びなさい。」と。

天国には石の板があって、そこには、生まれる時から全ての人間の名前が書き記されている、という昔からの言い伝えがあります。名前は書かれています、その文字は、その人が人生の中ですることによって、濃くなったり薄くなったりするのだそうです。きっと私たちの名前も全てその板に書いてあるのでしょうか。しかし、書いてあることで満足してはいけません。特に皆様は、洗礼を受け

て、信仰の生活をして、み言葉に従おうとしているのだから、ある程度は、はっきり書かれていると思います。しかし、最後に判断される基準は、書き記された文字が濃く見えるか薄く見えるかです。私たちは、神様からいただいたこの命をどのくらい一生懸命に、上手く使って、活かして、生きているのでしょうか。

天国に行くと、イエス様に会う前には緊張すると思います。震えながら、「どうなるのか。どうなるのか。」と思うでしょう。そして、頭を上げて見た時に、自分の名前がはっきり見えれば「ああ、よかった。」という気持ちになるのでしょうか。そのようになれるように頑張りましょう。

この世で得られた幸福に、一番の価値を置いて喜ばないで、変わらない価値、変わらない幸せのために喜ぶべきではないかと思います。

ありがとうございました。

何か月か前にも説明をしましたが、ナタナエルというのは、12使徒の一人であるバルトロマイのことです。

今日は、少し違う角度から考えてみたいと思います。

今日の福音(ヨハネ 1:47 - 51)では、フィリポがナタナエルに話しかけました。その前の部分を読むと、フィリポは、「来てみなさい」とナタナエルに話しかけています。それを聞いたナタナエルは、フィリポとともにイエス様の方へ行きます。近づいてくるナタナエルを見てイエス様は、「まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」と、素晴らしい褒め方をなさっています。

福音では、ナタナエルはフィリポと話す前に『いちじくの木の下』にいた、と書かれています。イスラエル人にとって『いちじくの木の下』というのは、そこに席を設けて、真理を探しながら話し合いをする場です。つまりナタナエルは、『いちじくの木の下』で、「何が真理であるか。何がみ言葉であるか。何が聖書の正しい解釈であるか。」そういうことについて話し合いをしていたのです。そしてその様子を見たフィリポが、「私の仕えている主人は、本当の真理である。その方に会って見ないか。」と誘ったのです。その結果ナタナエルはイエス様に会い、心を奪われて12使徒になります。そして最後は殉教しました。

私たちの人生を振り返ってみましょう。たくさんの恩人との出会いがあったと思います。今は記憶にさえ無いような恩人もいるでしょう。その人のお陰で私はこのようになれた、と感謝の気持ちになる人がたくさんいると思います。私も、子どもの時、神学生の時、そして神父になってからも、いろいろ助けてもらった人がたくさんいます。しかし、人間の愚かさでしょうか。会わないでいる

うちにすぐ忘れてしまい、名前さえ出てこない人もいます。皆様にもそのように、人生の方向に大きな影響を与えてくださった人がいると思います。また、困った時に手を伸ばしてくれた人もたくさんいるのでしょう。

昔の教会の絵では、天使を描く時に羽をつけました。しかし、近世に入ってから、芸術家は天使に羽を描かなくなりました。それはつまり、「日常の生活の中で出会う天使は人間だ」ということです。皆様にも、天使のような恩人たちがいたと思います。もし逆に、私たちにその天使のような役割ができれば、誰かに手を伸ばして、その人を救う役に立てれば、これは最高ではないでしょうか。聖書の中でも、イエス様は「もし、あなたによって誰かが天国に入ることができれば、最高の愛の実践である」とおっしゃっています。

私によって救われ、今もどこかで一生懸命生きている人がいれば、これも最高の喜びではないでしょうか。

今日の福音を通して、そして天使の祝日を通して、もう一回、考えてみましょう。もし私たちが天使のような存在になれば、それは素晴らしいことです。そのように頑張ってみるのは大切なことです。いつも助けをもらう立場ではなく、足りないことの多い小さい力でも人の助けになれば、最高の幸せではないでしょうか。そのような立場になれるように祈りながら、このミサを捧げましょう。

ありがとうございました。